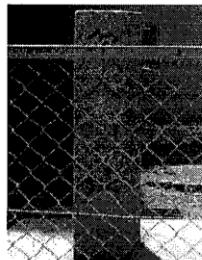
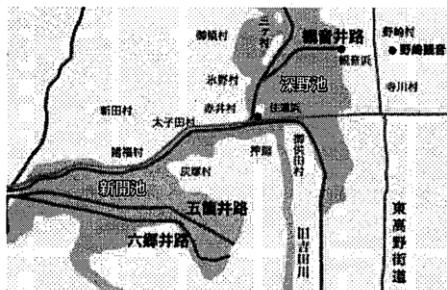


古堤街道を往く②

「勿入澗」の変遷～古堤街道成立の前史～



「勿入澗止」碑（諸福6丁目）石碑の南側に新開池が広がっていました



深野池・新開池の立地図(大東市立歴史民俗資料館「常設展示案内」より)

京橋から東へ寝屋川沿いに中茶屋。
(大阪市鶴見区)あたりまで来ると、
古堤街道は一旦、中央環状線・下水
処理施設により分断されますが、大
東市に入るとき福7丁目から、再び
往時のルートを歩くことができま
す。西諸福墓地を左手に東へ進んで
行くと府道鴻池新田停車場線と交差
しますが、そこから30メートルほど
北に「勿入澗止」の石碑が立つてい
ます。

「勿入澗」とは、かつて河内平野に
存在した河内湖のことを指し、清少
納言の「枕草子」にその名が見られ
ることから、平安時代中期頃には、こ
のように呼ばれていたようです。

また室町時代には、「広見池」と呼
ばれていたことが「河内水走文書」
に記されています。

中世から近世にかけて、大和川に
よる土砂の堆積で、広見池は2つの
池に分かれ、17世紀末に貝原益軒が
「勿入澗止」碑（諸福6丁目）石碑の南側に新開池が広がっていました

は大池なり。ふかうの池の西南にあ
り」と、この2つの池が紹介されて
います。現在の大東市域にあつたの
が「ふかうの池」(深野池)で、その西
南の東大阪市域にあつたのが「勿入
澗」がなまつた「内助が澗」すなわ
ち新開池でした。

18世紀初めの大和川付け替えによ
り、深野・新開両池が新田となつた
ため、これまで池や川の変動の影響
を受けていた古堤街道は主要な街
道として発達していきました。

(生涯学習課)

古堤街道を往く

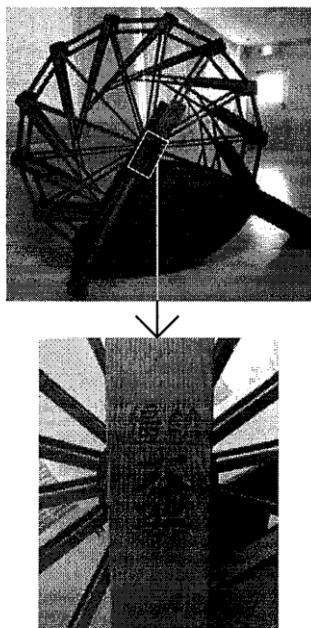
古堤街道を往く③

新
物語

第40話

古堤街道を往く③

「農業で栄えた八ヶ所領の村々」

「諸福」の銘が刻まれた水車
(大東市立歴史民俗資料館所蔵)

古堤街道を諸福から住道方面へ進
んで行くと、街道の通る場所が北側
の土地よりも約2メートル高くなっ
ており、街道が寝屋川の堤防上に築
かれた道だったことがよく分かりま
す。街道の北側にある諸福・新田・御
領・水野などの地域は、かつて深野
池から新開池の背後に広がる低湿地
帶でした。近年の御領遺跡での発掘
調査によって、この付近では13～14
世紀頃に集落が形成されたことが明
らかになりました。

室町時代には、諸福・新田・東水野
(現大東市)と大和田・島頭・馬伏。
(現門真市)・安田・下(現大
阪市鶴見区)の各集落は、京都の北野
天満宮の莊園「八ヶ所領」となって
いました。八ヶ所領は、淀川と旧大和
川に挟まれた軍事・交通の要衝の地
であり、領内には「八ヶの湖」と呼ば
れた底の浅い池沼があったよう

高度成長期以降の都市化によ
て、旧八ヶ所領の田園風景はすっか
り失われてしましましたが、今でも
古堤街道沿いには、農業用の水路や
樋門の跡などが残つており、往時の
面影をしのぶことができます。

(生涯学習課)

「八ヶ所」の名称は、江戸時代にも
北河内西部の村々の総称として存続
し、後には「八ヶ庄」とも呼ばれるよ
うになりました。八ヶ庄の村々は水
利などの広域的な問題については連
携して対処していました。

近代に入つてからも、旧八ヶ所領
では稻作や蓮根栽培などが盛んに行
われました。また諸福は、灌漑用の
農具であった水車の製造拠点でも
あり、一時期は大阪府内の市場で70
パーセントの割合を占めていまし
た。

高度成長期以降の都市化によ
て、旧八ヶ所領の田園風景はすっか
り失われてしましましたが、今でも
古堤街道沿いには、農業用の水路や
樋門の跡などが残つており、往時の
面影をしのぶことができます。